



天然林(二次林)の再生



株式会社 日本経済研究所

常務執行役員

地域本部 上席研究主幹 佐藤 淳

東京都の奥多摩では長い時間をかけて都が天然林化を図っている。事業は少しずつしか進捗していないが、仮に天然林(二次林)に戻れば、大きな経済効果(観光+花粉症)が期待できる。但しそのためには従来の林業を超えた枠組みが必要となる。

最近山ガールならぬ、中年山男として、東京都西部の奥多摩を訪れることが多い。びっくりするのは杉の多さである。奥多摩は急斜面が多く林道はほとんどない。先日、奥多摩三大急登とよばれるような急斜面にもびっしりと植林されていて、看板をみたら、紀元2600年記念植林とのことで愕然とした。75年も経っているのに細いままだった。

戦中～終戦後に、資源がなく、家も焼かれ、生活水準が落ち込んだ我が国は、必死になって杉を植えた。当時は電柱と下駄、それから奥多摩では建築現場の木組みが主たる需要想定だった(木組みは細い方がよい)。今から考えるとおかしなマーケティングだが、戦中から敗戦後しばらくは統制経済で、物資は大幅に不足し、生活水準は途上国並みであったので、そんな事情が反映されているのだろう。

杉を植えて、数十年が経った。電柱が地中化されていないのも驚きだが、コンクリート化は進み、下駄は消滅し、家の造りも、建築現場も変わり、スギ需要は激減した。高度成長は予測できなかったのである。さて、再びスギを植えるべきか、植えざるべきか。

林業では再造林のコストが結構かかる。再造

林をしなければギリギリ黒字でも、再造林をすれば赤字になったりする。しかも最近は鹿が植林した杉の苗を食べたり、猪が荒らしたりするので、獣害対策ネットまで必要だ。さらに言えば、数十年後を見通したマーケティングも必要と、ほとんど人知を超えている状況である。

他国はどうしているのか。世界的にみて林業が進んでいるのは欧州である。ドイツやフランスでは、近自然型林業といって、天然更新(広葉樹)を主体とした林業に切り替えている。かつては我が国もそれに近かった(戦前)。戦後スギを大量に植える際に、昭和天皇に上奏したら、「広葉樹はどうするのだ」と喝破されたとか。

さて、実は奥多摩は広葉樹への転換を進めようとしている。東京都の花粉症対策の一環だ。多摩地域には3万haに及ぶスギ・ヒノキ林があるが、このうちの6割(1.8万ha)について広葉樹化を図らんとするものである。

具体的には、①モザイク状にスギ林を伐採し広葉樹に植え替える(色彩豊かな森事業、10年間で0.2万haが目標)、②50年間に4回の間伐を実施し広葉樹との混交林化を図る(森林再生事業、10年間で1.6万haが目標)の2つの予算措置がとられている。

実績は、①が2006～2013で150haである。2014からは何故か事業が休止されている。②は年間5～8百ha程度実施されている。2002～2012の10年間で0.6万ha程度だろうか。目標の3分の1程度である。都の全額負担による間伐であり、希望者殺到をみこんでいたが、結果はそうでもない。協定の年月が25年と長いことや、森林所有者全員の承諾が必要であることがネックとなっている。

広葉樹化ゾーン以外はスギが再植林されている。見た感じの印象だと、交通便利なところほど、スギの再植林が多い。所有者にとっては当然かも知れない。しかし、駅から見えるところを広葉樹化したほうが、観光には有利に働くようにも思える。

さて、仮に駅近くまで天然更新が進んだと仮定しよう。50年後の奥多摩である。するとどうなるか。同じ自然条件の高尾山に近い植生になるだろう。奥多摩でも尾根筋に天然林が残っていたりするが、そうなるだろう。新緑のシーズンには山桜が混じって見事である。紅葉も期待できる。高尾山や嵐山のような観光名所が、数え切れないほど誕生するといったら良い。しかも花粉症がなくなるというオマケもつく。

経済効果を試算してみよう。観光客は現在、高尾山に260万人/年、奥多摩には170万人/年である。少なくともキャッチアップするとして、+90万人、消費単価2千円強とすると、約20億円増である。さらに、奥多摩駅、御嵩駅、沢井駅の各拠点周辺に高尾山並みの入込があると仮定すると、780万人/年、+610万人、+120億円となる。スギ・ヒノキ面積で割り戻すと、1haあたり約40万円/年である。

一方、花粉症の経済損失・効果の研究によると、奥多摩を伐採して紅葉樹に植え替えた場合の社会的便益は12百万円/ha年との試算がある¹。観光の方も、花粉症の割引率に合わせて再計算すると、両者合計の社会的便益は20百万円/ha、B/C（便益/費用）は約9倍にのぼる²。

計算上は東京都の対策よりダイナミックに皆伐して広葉樹を植林しても社会全体の経済性はあることになる。難題は、受益と負担のデザインだ。今の林業ビジネスモデルで吸収できる話ではない。現在の木は相場より高く買い上げる代わりに近自然型林業を義務付ける。買い上げた材木はCLTを活用して木造都市を創出する。そんなダイナミックな社会デザインが必要かも知れない。

■図1 戦後すぐの奥多摩（黄色が広葉樹）



■図2 現在の奥多摩



(出所) 東京都HP <http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/norin/kafun/sugikafun.html>

1 椎名 (2011) 「都市周辺のスギ人口林とスギ花粉症に関する経済分析」
2 伐採及び植林に関する費用を2.2百万円/haとしている (椎名2011)